異文化間情報連携学会

# CINEX Web Journal

第 16 号

発行日 2025 年 12 月 1 日

★ 生成 AI 時代における人間の役割と技術的責任について　　清水 悦郎

## 生成 AI 時代における人間の役割と技術的責任について

＜長崎総合科学大学　助教　清水悦郎＞

近年、メディアを中心に「生成 AI（Generative Artificial Intelligence）」という語が急速に普及し、社会的関心が高まっている。AI 技術自体は 1960 年代頃から研究が開始されており、コンピューターゲームなどを通じて一般に認知されてきた。しかし、近年における機械学習およびディープラーニングの高度化に伴い、膨大なデータから新たな情報を生成する生成 AI が登場し、その社会的影響は従来の AI 技術よりも顕著になりつつある。

生成 AI は、学習したデータを基盤として文章、画像、音声、動画など多様な形式の情報を生成可能である。この特性により、文章翻訳や自動要約、画像生成、資料作成支援など、幅広い応用が実現されている。また、業務自動化を目的とした導入も進みつつあり、効率性向上やコスト削減への寄与が期待されている。

一方で、生成 AI には一定の限界が存在する。生成 AI は確率的生成モデルに基づくため、生成される情報は常に完全性や正確性が保証されるわけではない。特に誤情報の生成（いわゆる「幻覚（hallucination）」）は、生成 AI の本質的課題として指摘されており、利用者が誤った内容を事実として受容する危険性を孕む。

医療分野など高い正確性が要求される領域では、この問題は重大である。例えば、AI による医療画像の誤認識に基づき誤った診断情報が提示された場合、これを人間が無批判に採用すると深刻な医療事故につながる可能性がある。生成 AI は判断結果に対して責任を負わないため、最終的な意思決定は必ず専門知識を有する人間によって行われる必要がある。

生成 AI を安全かつ効果的に利用するためには、利用者側の情報リテラシーおよび技術理解が不可欠である。知識を持たない利用者が生成 AI に依存した場合、誤った内容をそのまま受容・使用する危険性が高い。その状況は、講義内容を十分理解していない学生が課題の作成を生成 AI に依存し、不正確なレポートを提出する事例に類似する。

このことから、生成 AI は人間の思考や判断を代替する存在ではなく、あくまで補助的なツールとして位置づけるべきである。

高度なプログラムであっても、バグや脆弱性は必然的に存在する。大企業で使用されているシステムでさえ、ランサムウェア攻撃などにより被害を受ける事例は少なくない。技術を過信した利用者は攻撃者のターゲットとなりやすく、AI システムの導入に際してはセキュリティ面からの検討も不可欠である。

生成 AI は多様な領域において有用性を持ち、その発展は社会に大きな恩恵をもたらす可能性を秘めている。しかし、生成 AI の特性を十分に理解し、適切な監督・検証を伴わない利用は重大なリスクを生じうる。今後、生成 AI に関する法規制やガイドライン整備が進むと考えられるが、利用者自身が正確な知識と批判的思考を持ち、責任を伴う利用を行うことが不可欠である。生成 AI の健全な社会実装のためには、技術的理解と倫理的配慮の双方を重視した利用姿勢が求められる。